「大学の営みとしての教養」

前国際基督教大学学長　絹川正吉氏

はじめに：原点を守れ

絹川　東京農工大学「大学教育センター」開設を心からお祝い申し上げます。本日は記念式典にお招きいただきまして、大変光栄に存じております。

この種のセンターのはしりは本日センター長の有本章先生がお見えになっていらっしゃいますが、広島大学の「大学教育研究センター」であったと思います。広島大学はその後、「高等教育研究開発センター」に改名しました。改名をなさったときに、ちょうどＩＤＥ（民主教育協会）の理事会があり、そのの席上で、なぜ改名したのかということが話題になりました。私は内心、改名には反対でありました。人様のことに反対するのも何ですが、改名をするのはおかしいのではないかという思いが、そのときに強くありました。率直にいいますと、とかくこの種のセンターは、高等教育研究者の論文のネタ作りの場になりやすい。東京農工大学は名称をズバリ「大学教育センター」となさいました。どうぞ改名をなさらないで、この名称を堅持して大学教育に貢献されることを私は期待しています。

教養とは

本日の私のテーマは、吉永助教授からの連絡によれば、「教養教育について」というのが農工大のご希望だそうです。晴れある式典にふさわしいような教養教育の話ができるか、自信がありません。私は数学者という最も教養からは遠い部類の人間ですので、教養について何を話すか、多少苦慮いたしました。教養とは何か。数学者ですからすぐ定義をつけたがるわけでありますが、教養を定義することは不可能です。このことについては、先生方もご同意であろうと推察します。

ご承知のように1991年に大学設置基準の大綱化がありました。そのときに大学設置基準の中に、大学審議会の答申に基づいて次の文言が入りました。「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に大学は配慮しなければならない（大学設置基準の19条）。」　大学設置基準19条は、他の設置基準の条項と比べて性格が違います。別の言葉で言いますと、大学設置基準のほとんどは、いわゆるシステム基準です。19条だけが、ある意味では本質基準を示しているわけで、なぜこの基準が定められたかについては歴史的な経緯があります。その経緯を今日は話するつもりはありませんけれども、いずれにしましても、大学設置基準上、豊かな人間性を涵養することが大学の基準であるということになっているのです。この文言からいえば、教養というのは豊かな人間性を涵養するものでなければなりません。それでは豊かな人間性とは何か。それはまた定義不可能です。

「教養」という言葉に対応する英語は何でしょうか。私の関知する限りでは英語に「教養」にストレートに対応する言葉はないと思います。逆に、英語のEducation, Culture, Liberal Artsを、日本語で教養と訳すわけです。教養と訳されているところを英語の原本に当たりますと、大体が教育かCultureです。Liberal Arts を教養と訳すのは、誤訳であると私は思っています。Liberal Arts は「教養」ではありません。

「新しい時代の教養」

いずれにしましても、教養という言葉は極めて日本的な言葉です。そしてその言葉を大学教育で公に使っているわけです。混乱するのは無理ないわけですね。教養問題は、日本の文教政策にとって大変重要な課題になってきました。何度も大学審議会で取り上げられました。また最近は中央教育審議会が2000年に「新しい時代の教養」というタイトルで長い答申を出しました。答申の要点をみますと、そこで言われている教養とは、社会とのかかわりの中で自己を位置付けること、自国、他国の文化・宗教理解を深めること、科学技術の学問的理解と社会的理解を与えること、知的基盤としての国語力、ということになります。そして最後に修養的教養ということを言うわけです。加えて、礼儀・作法の形を教養教育の内容に含めています。これは儒教的発想です。そういう考えからしますと、知識と身の程をわきまえることが教養だということになると私は思います。

この中教審答申の主張には背景があります。言ってみれば国際社会と知識産業化社会の中で日本人が働けるようになるための教養は何かということです。間もなく中央教育審議会の大学に関する新しい答申が出ますが、その中では知識産業化社会を知識基盤社会と言いかえています。これはKnowledge-based Societyというイギリスが使いはじめた言葉を日本語で言いかえたものです。いずれにしましてもそういう世の中の動きに対応して、適切な人材育成をしなければならない。そういう人材に備わるべき教養というのは何かということを、結局は言っているわけです。

中央教育審議会の答申を突き詰めれば、基礎教育と倫理教育です。基礎教育と倫理教育というのであれば、基礎教育と倫理教育をしっかりとやればよいのであって、なぜそれをあえて教養と呼ぶのかというのが私の疑問です。そしてその倫理教育は、先ほども言いましたように、その思想的基盤が修養主義・教養主義という儒教的倫理に基礎付けられているわけです。日本の国を支える国民の倫理の基盤はどこにあるか。これは大変重要な問題です。元東大総長・文部大臣で参議院議員の有馬さんが、ある席上で、日本にもかすかに倫理基盤があると言われた。この話を私はよく紹介するのですが、非常に印象的な話でした。倫理基盤はある。それは何か。それは儒教だというわけです。なるほど私は儒教的環境で育ちましたから、日本社会の根幹は儒教だといわれると、そうかと思うのですが、問題は今、儒教倫理で機能するかどうか、ということです。毎日毎日人殺しのニュースです。儒教倫理が機能していないわけですね。

有馬さんの話を伺いましてから数年たちまして、当時、私は大学セミナーハウスの館長をしていましたが、そこに有馬さんをお招きして、先生方と懇談をしていただきました。その懇談の後で、有馬さんに私は問うてみたわけです。先だって先生は儒教倫理がかすかに残っていると言われましたが、今はどうお考えですかと。すると「全くない」ということでした。数年で有馬先生の意見は変わってしまったわけです。倫理の問題というのは、今、日本社会にとって大問題です。倫理教育をどこで行

うのか。大学で行うことが当然だとすれば、大学は研究が中心だから、研究を盛んに行えば、倫理が備わる、ということでなければなりません。どなたもこれには賛成しないだろうと思います。

いずれにしましても、21世紀に耐える教養教育というのは何なのか。中教審の答申にも書かれていないのではないかと思うのです。

教養は無用の用

これは私の勝手な考えでありますが、そもそも、教養というものは無用の用です。役に立たないものが教養なのですね。役に立つものは実利であって、それはそれとして教育すればよろしいわけです。教養というのは無用の用。無用の用というのは、民芸の思想です。民芸品に描かれている美しい図柄は、その器を使うことにとっては何の意味もないわけです。使うという事態から見ますと、器に描かれている紋様は無用なものです。無用の用ということは、柳宗悦が言い出したことでしょうか。私どもの大学には民芸品の博物館があります。一度おいでいただきたいと思いますが、無用の用というものを大学の中に置いているわけです。

直接実利を目的とするものは、教養ではないのではないか、と言えばいささか言い過ぎかも知れませんが、無用の用としていぶし銀のように人間を豊かにするものが教養でありましょう。中教審、あるいは大学審が示す教養というのはあまりにも直接的過ぎるのではないかと思います。もちろん実学教育は必要でありますから、それはそれとしてすれればよろしいのです。

教養観いろいろ

それで思い出したのですが、司馬遼太郎の小説の一つに『最後の将軍 ― 徳川慶喜 ―』というのがあります。大変おもしろい。私は明治が好きでありまして、先ほど宮田学長から伺ったところによれば、この大学の中に大久保利通の短剣を祭った碑が建っているということで、先ほど車の中からちょっと拝見いたしました。この大学が歴史的に由緒正しいことを、これまで全く承知していませんでした。明治の変革にかかわっていたということで、改めて敬意を表する次第です。

私は司馬遼太郎の小説を愛読しているのですが、その徳川慶喜の小説の中で司馬遼太郎はこう言っています。慶喜像は「才華があふれ、権謀が多すぎ、頭脳の回転が早すぎ、進退の計算が深く、演技がありすぎる」と。ご承知のように、慶喜は水戸家の出身でして、いわば徳川本家からすれば傍流です。その傍流が一橋家に入り、徳川家の世継ぎになるかもしれないという位置についたことから、慶喜に対してはいろいろな疑いの目がかかっていて、幕臣は慶喜に謀反の疑惑があるとすら見ていた。そのことを当時の将軍（慶喜の前代の将軍）家茂にしきりと吹き込んだらしいのです。それであるとき家茂が重臣に向かって、「慶喜に謀反の心ありと聞くが、まことか」と尋ねたところ、その重臣はそういうことではないとこんこんと諭した。その諭しを聞いて、家茂が顔を赤らめたという。その話を慶喜が伝え聞いて、慶喜は不快に思うより恐縮したというのですね。そのことを司馬遼太郎は、「そのように反応するところが慶喜の教養である」と書いています。意味が深いですね。日本人の教養というのはそういうものです。そういう教養は、大学では教えられない。

前の一橋大学学長であった阿部謹也さんの教養観は、多少それに近いかもしれません。彼はこう言

っています。「自分が社会の中でどのような位置にあり」── これは先ほどの中教審の答申の冒頭にも出ていましたが ──「社会のために何ができるかを知っている状態を、教養がある、というのである」。すなわち身の程を知っているということですね。身の程を知って、何ができるか。何もできないことをよく知っているということが大事のですね。そして教養というのは、立居振舞を統べる。そう言われると何となくわかります。あるいは教養というのは品格の源泉です。慶喜の教養というのは、慶喜の品格です。「不快に思うよりも」云々というところですね。

大学人の教養：INTEGRITY

そこで本日、私が特に問題にしたいことは、現代における大学人の教養とは何なのかということです。大学人の教養を問う。「教養教育」のことを話せということでありますが、あえて私は「教育」を外しまして、「大学の営みとしての教養」というタイトルをつけさせていただいています。教養というのは、教養教育として取り上げる問題ではないのではないか。むしろ大学の営みそのものが教養にかかわる問題をはらんでいるのではないかということを思いついたものですから、大変貧しい内容でありますが、そのことを以下中心にお話ししたいと思います。

先年、ニューヨークにある国際基督教大学支援財団の理事会に出席したついでに、ワシントンからペンシルバニアの周辺にかけての大学を訪ねてみました。ワシントンではジョージタウン・ユニバーシティを訪ねました。ジョージタウンのディーンのオフィスに入りましたら、いろいろなパンフレットが置いてある。その中に、「THE Honor System」というパンフレットがありました。大体15ページぐらいの小さな冊子です。アメリカでは学業が優れている学生はどんどん先へ進んで勉強できるというオーナーカリキュラムがあります。そういうカリキュラムのことだろうと、私は初めに思ったわけです。開けてみたら全然違うのです。よく見ますと、表紙の絵の一番上に、半円状にINTEGRITYと書いてあります。INTEGRITYを日本語で何と訳すのか、大変難しいですね。また、ペンシルバニアのほうでは、有名なHaverford Collegeという、リベラルアーツカレッジとしては超一流のカレッジでありますが、そのカレッジも訪ねました。訪ねたというのは、その隣に津田梅子が勉強したBryn Mawrという女子大がありますが、そこに私の娘がポスドクで教えていましたので、そこを訪問したついでに寄ってみました。HaverfordではHonor Codeと言っています。 Codeと言いますから表現が大分内容に近くなってきます。

このINTEGRITYという言葉で表しているアメリカの大学の営みは、著名なカレッジではどこでも見られます。その根底にあるINTEGRITYという言葉を、私はあえて「知的誠実性」と言います。辞書にはそういう訳はありませんが、大学で使う場合には「知的誠実性」という言葉で私は表現したいと思います。この知的誠実性ということは、言うまでもなく学問的営為を根底で支える思想です。大学人の教養の原点というのは、知的誠実性であるといっても過言ではないと思います。アメリカから帰りまして、私は早速大学の幹部会においてそのことを問題にしました。私たちもそういうことをずっと問題にしているけれども、明言していないではないか。はっきり文書においても、実際の教育活動においても、そのことをきちんと言うべきであるということで、「アカデミック・インテグリティーに関するＩＣＵの方針」ということを、学部長が起草して、それを今、学内のホームページに掲げています。

その冒頭にはこう書いてあります。「学問の卓越・真理の探究を目指すリベラル・アーツの構成員として、本学の学生は、すべての学問的活動において、きわめて高い学問的倫理基準を維持することが期待されています。学問は、当然の事ながら、過去の研究業績の蓄積の上に成り立っています。従って、他人の研究に使われている考え方や言葉、文章や調査研究をあたかも自分自身のものであるかのように偽ることは、学問的倫理基準を侵すことになります」。ICUの学部長は、このようにストレートに書きました。

HaverfordあるいはGeorgetownのパンフレットでは、まずなぜこれがHonorなのか、という説明から始まります。しかもそういうHonorシステムというものは、学生だけが守るべきことではなくて、大学の構成員全体が守らなくてはいけない。教員も守らなくてはいけないということです。ICUでは、学生に対して、「あなた方は正直であれ」と言ってしまうわけで、これは中途半端です。本来は構成員全体に向かって、INTEGRITYということを問題にすべきです。ICUの貧しいところを見せてしまいましたが、いずれにしましても、知的INTEGRITYということが大問題だと思うのです。

先ほどご紹介いただきましたように、私は日本私立大学連盟の理事、そしてまた常務理事を務めました。常務理事になりますと、何か業務を一つ担当しなければいけないということで、私は大学教員の倫理綱領を作成する業務を担当しました。倫理綱領で第一に述べたことは、私立大学でありますから、私立大学の教員は、所属大学の理念を尊重し、その目的の達成に貢献する、ということです。これが倫理です。そういう発想でした。国立大学は今回法人化しましたから、国立大学それぞれがそれぞれの理念というものを明示することになっています。先ほど宮田学長からもいろいろとお話がございました。農工大の目的の達成に貢献するのが農工大の教員の倫理である。そういう職業倫理の根底が知的誠実性だということを、綱領に書き込んだのです。それを基本として、学生に対する倫理、同僚に対する倫理、研究者としての倫理、社会に対する倫理ということの概要を示し、各大学の参考に供したわけです。

「学問の原方向性」（一般教育学会の業績）

ここで一度話題を変えます。私は大学教育学会（旧一般教育学会）の会長をしばらく務めました。一般教育学会に関して若干のご紹介をさせていただきたいと思います。一般教育学会は1979年に発足しましたが、大学教育あるいは一般教育を研究する学会として、日本で初めての学会です。後に高等教育学会ができ、有本先生が2代目の会長になられておりますが、いずれにしましても一般教育学会、大学教育学会の歴史は日本の大学の歴史として注目すべきものではないかと思います。ほとんど注目されておりませんで、学会員は現在700名ちょっとです。機関会員の制度があり、大学としてご加入できます。農工大にセンターが創設されたことを記念して、大学教育学会にお入りになることをお勧めしたいと思います。

一般教育学会は、大学教育を対象とする日本で最初の学会ですが、その学会創設のステートメントに、一般教育の学的基礎付けを目的とする、とあります。一般教育の学的基礎付けということを問題にしたわけです。ところが学的基礎付けだけではなくて、ミッションステートメントもあるのです。すなわち、一般教育の恩恵を社会に拡大し、人間の偏狭さから解放する、と述べられています。学会でこういうステートメントを持つということは、希有なことですね。恐らくほとんどないのではない

でしょうか。ですから、一般教育学会というのは、一般教育の学術的研究と、社会に対するコミットメントの両方を目的に創設されたのです。

その後、学会名を大学教育学会に改名しました。大学設置基準の大綱化ということに伴い、一般教育科目という名称が公的記述から消えたということで、一般教育学会という名称を大学教育学会に変えなければならないという論が起こり、改名するか、しないか3年間議論しました。そのとりまとめ役を私が務めまして、皆さんからの批判に耐え、いろいろな工夫をして、大学教育学会という名称に変えたわけです。工夫の一つというのは、英文名は変えないということです。英文名はLIBERAL AND GENERAL EDUCATION SOCIETY OF JAPANです。英語名は変えないということで妥協を図りまして大学教育学会に変わったわけであります。

改名問題の本質は次のようです、一般教育は学術的研究対象としてだけ取り上げるものではない。一般教育はミッションステートメントに支えられて成立するものである。改名により後者が弱体化するのではないか。これが本質的な問いです。学術研究ということによって一般教育、あるいは通常言われています一般教養の研究が全うされるのか、ということです。

そういうテーゼを抱えた学会の中で、学会の方向を基礎づけた幾つかの業績といいますか、成果があります。その一つを代表するのが、1990年の大会における藤沢令夫先生の基調講演です。藤沢令夫先生は京都大学教授、哲学者でありましたが、先年お亡くなりになりました。その講演のタイトルは「学問の原方向性」ということでした。この講演は非常に大きい影響を一般教育学会に与えました。その内容をここでご紹介したいと思います。

藤沢先生は、一般と専門の概念整理をするということで、先生のご専門であるプラトンから説き起こします。特にプロタゴラスを取り上げ、「テクネーとして学んだのではなく、一個の素人としての自由人が学ぶにふさわしいものとして、パイデイアのために学んだわけなのだ」というところを取り上げたのです。

プラトンは、テクネーというものとパイデイアというものを、厳しく対比させています。そしてパイデイアこそは自由人、教養人が学ぶべきものであるとします。そのテクネーとパイデイアという言葉を藤沢先生はあえてテネクネーのほうを専門的技術、パイデイアのほうを一般的教養という日本語を当てて事柄を展開なさったわけです。パイデイアは、イデアの探求に見られますように、観想（theoria）と実践（praxis）が関わります。西洋的学問の原点というのは、観想と実践の分断 —— ここにアリストテレスが介在するというわけでありますが —— によって、固有の方法と対象を持つ、いわゆる学科、専門分野をつくったことです。それが現在の学問の原形で、観想と実践の分断はその後の西洋の学問をずっと貫いている問題だというわけです。その結果、パイデイアの中から生まれた学問が、今や第2のテクネーになったというのがこの藤沢先生の説であります。素人として自由人が学ぶべき事柄の中から学問というものが発生し、それが専門分科という独特のあり方をすることよって、実はそれがパイデイアに厳しく拮抗するテクネーとなってしまった。これが現在の科学技術の問題で、それがパイデイア自身の中から出ているわけです。

それで藤原先生は、プラトンにおけるテクネーに対するパイデイアを、第1のテクネーに対する第1のパイデイアといいます。そして現代におけるテクネーを第2のテクネーとして、それに対応すべき第2のパイデイアの問題が、現代における教養の問題だというわけであります。

客観と没価値の神話

第2のテクネーの問題を、別の角度から藤原先生は取り上げています。原初的な学問に於いては、自然探求と人間のあり方が分裂していない ―― すなわち、人間のあり方を問うということと、自然を問うということとは同一のことでした。単一の知を形成しているわけです。その単一の知の崩壊の原因が、この科学的知、あるいはディシプリンズの確立ということであるわけです。科学的知においては、究極的な実体を想定しています。物理学を思い浮かべていただきますとわかりやすいでしょう。実体というのは永遠なるがゆえに変化しないものであり、無属性、属性がない。そしてセンスレスでヴァリューレス（没価値）です。

科学において、世界というものは、そういうヴァリューレスな実体の結合によって説明されています。しかもその説明の仕方は、実体を主語とし、属性を述語とする主語・述語形式によっている。そういうふうに世界を認識する。したがって、没価値的なものの世界が主役になってくる。すなわち、客観的ということが中心である。そして認識主体というものは主観的なもの、価値というのは主観的なものとして排除される。「客観的」という価値が優先したというのです。そこに第２のテクネーを生む迷妄があったというわけです。

そういうことをわかりやすく藤沢先生は説明しています。「対象の客観的あり方だけに関わる科学的言明」とはどういうことかというと、「ここにものがある」という言明が時空空間以外との関連なしにも確定した意味を持てるとしたことである。それはなぜ問題か。そのアナロジーが局部照明の事態です。ここにものがあるときに、このものだけに光を当てるわけですね。このものは私の手でぶら下げているわけですから、このもの自体としてここにあるわけではない。ところがこのものだけに光を当てて見たときに、私の手で支えているという状況は全部捨象されてしまうわけです。そのことを藤原先生は、シンプルロケーションといいます。局部照明することにより、ものの周辺をやみの中に沈めてしまう。対象の本質がそこで変貌していることに気づかない。別な言い方をしますと、これは私の言葉でありますが、結局、科学というのは、こういう言い方は不遜な言い方かもしれませんけれども、突き詰めていいますと、対象を科学が成立するように、主語・述語形式で記述している、ということになります。

以上のような問題を第２のテクネーは抱えているわけです。そういう第２のテクネーが生まれたのは、アリストテレスに始まる観想と実践からの分断である。theoriaとpraxisが分断されている。そして学問は、「知識それ自体のための知識の追求」ということを至上善とする。知識それ自体のための知識の追求、というテーゼによって私どもは専門家として生きているのです。

私はかつて数学者でありましたが、今は数学者ではありません。すっかり数学から離れてしまい、なかなか数学に戻れませんが、かつては数学バカでありました。数学バカの唯一のよりどころは、数学が何かに役に立つからではありません。数学それ自身は無意味です。なぜ数学か、数学のための数学なのです。そういうことを言って、胸を張って生きてきたわけでありますが、それは問題だというわけですね。現代の科学は技術と結合して第２のテクネーを生む。その結果、第２のテクネーに対応して第２のパイデイアが問われている。これが問題だ、というわけです。

私はここでふと思うのです。　第２のテクネーというのはどこから出てきたかというと、パイデイア自身から出たわけです。パイデイア自身は、テクネーに対して、一つの自立した立場をとるわけです。そうすると、そのパイデイア自身から生まれたものに対して、パイデイアの営為者は自己責任が

ある。そうではないでしょうか。もし我々営為者が知的に誠実であるならば、そこがみそなのです、知的誠実であるならば、自ら生み出したものに対して我々は責任を負わなければ、それは知的誠実性にたがう。ですから、そういう視点から教養の問題は我々自身の、すなわち大学人自身の問題として、必然的に受け止められなければならない。そう問いますと、これは教養教育の問題ではなくて、大学人の問題になります。

一般教育の思想性：「欠如態」の思想

もう一つ、一般教育学会の功績として、私が特に注目していることは、初代の会長であった扇谷尚先生の論文の中で、次の様に述べられていることです。「普遍的経験の枠組みに照らして考察するとき、専攻主軸 —— すなわちディシプリン主軸のカリキュラムに欠落するものがある」。こういう思想を扇谷先生は展開したわけであります。私はそれを「欠如態の思想」といいます。欠如態の認識です。自分の専門の営みそれ自身が欠如態であるという認識を我々は持てるか、ということが問われているのです。このことを一般教育の観点から考えますと、一般教育の意味付けは、欠如態の認識から生ずるのです。すなわち、欠けていると認識ができる思想的基盤がなければできません。いかなる思想において、我々の第２のテクネーというものを欠如態として認識するか、思想が問われるわけです。

別の言い方をすれば、それぞれの大学の教育理念が問われているのです。教育理念から一般教育が発想される。一般教育は他人に強制されて行うものではない。欠如態認識の必然として位置付けられることなのです。東京農工大学はどういう教育理念に立つか。その理念に立ったときに、果たして第２テクネーというものは欠如態として認識できるかどうか。認識したときにその欠如態を補うものとして一般教育はどうしてもやらなければいけない。そういう問題性をはらんでいるのではないでしょうか。

環境会計の思想

私は素人ですから、詳しくはありませんが、最近、環境会計学というものが大変盛んになっています。これは緑の党などが盛んなドイツで発達しているようです。私が勤めていました大学にも環境会計学の専門家が任用されました。彼らの言うことを聞いてみますと、環境主権ということを言っています。自然環境から我々は多くの便益を受けているわけですが、便益を受けることによって環境破壊をしている。自然環境から便益を受ける権利、あるいは先ほどリスクの話がありましたが、リスクを回避する権利を我々は次の世代に引き継ぐ義務がある。我々が使い放題使って、地球を崩壊させてはいけないのだという考えです。次の世代も地球から恵みを受けなければいけない。そういう恵みというのは、人類が永遠に継承していく権利であると考えるのです。

そういう考え方からすると、環境保全経費というのは、必然的に企業会計の中に取り組まなければいけない。すなわち、企業会計というのはものをつくり出すことに関する会計ではなくて、つくり出すことによって生ずる環境破壊のリスクに対する保全を含むものでなければならない。環境保全経費自身は、ものをつくり出すことに伴う必然的な経費である。そういう考え方が出てきたわけです。今までの環境問題というのは、例えば水俣病事件に見られますように、企業経営の外にある問題として

環境の問題を考えていたわけです。そういうことでは今後世界は存続できないというわけです。製造に伴なう環境破壊を防止する経費は生産費用に含める。そういう企業会計をさせないと、今後の企業は成り立たないだろうというわけです。

したがって、環境経営ということは経営の最重要課題であるという認識が徐々に起こりつつあります。そうしますと、環境破壊の問題は、企業の営みそれ自身の中の問題として認識されるわけですね。我々の第２テクネーに対する問題は、同じ構造をもっているのです。第2のテクネーの問題は、パイデイアという大学の本来的営みの只中から生まれたのでありますから、大学が知的誠実性を貫くということは、第2のパイデイア、すなわち教養の問題は、大学人が必然的に引き受けなければならない、大学の最重要課題だということになるのです。

具体的な課題

では具体的にどうするかということですが、なかなか答えは難しいですね。東京農工大はJABEEをお受けになっていますか。一般には知られていませんが、グローバルスタンダードということで、日本の技術者養成のグローバル水準を確保するために、JABEE（日本技術者教育認定機構）というものが設置されました。その認定基準を見ますと、工学教育においては教養教育基準というものをちゃんと置いているのです。工学教育において教養教育基準というものを置いている。例えば、「人類の幸福・福祉とは何かについて考える能力と素養」を教育していることが、工学教育としてグローバルスタンダードに適うことだという。そういうことをやっていなければグローバルなスタンダードを満たしていることにならない。さらに、「工学的解決方法が社会・地球環境に及ぼす効果や価値についての理解力や、技術者として社会に対する責任を自覚する能力」が問われます。先ほど宮田学長の挨拶にありましたが、リスクマネジメントの専門職大学院を農工大で設置するということですが、そこに深くかかわっている問題ではないかと思います。JABEEの教養基準には、それ以外のことも示されています。いずれにしても、工業教育において明確に教養教育基準が示されているところに私は注目するわけです。

少し古い本ですが、1987年に、アメリカのボイヤー（Boyer）という教育社会学者が『COLLEGE』という本を出しました。これはアメリカでベストセラーになりました。日本では大学ものをつくってもベストセラーにはなりません。全然売れませんね。私の本なんかは売れるわけはなくて、だれも買ってくれない（笑）。さて、『COLLEGE』という本は、アメリカのカレッジ教育に関して非常に洞察に満ちた見解を展開しました。これが一般の市民の読書界においてベストセラーになりました。アメリカという国は不思議です。これは恐らく『ニューヨークタイムズ』等が書評で取り上げたことによると思います。『ニューヨークタイムズ』の日曜版に書評が載るのですが、その書評欄というのは大変な分量ですね。そこに載るということがベストセラーになる第一歩でしょう。そういう社会的な仕組みもありまして、『COLLEGE』はアメリカにおいてベストセラーになりました。

先ほど少し話が出ました、広島大学の大学教育研究センターの初代のセンター長であった喜多村先生、他かが『COLLEGE』を共同で訳されて、『アメリカの大学』というタイトルでリクルートから出版されました。そのボイヤーの本の中で、Integrated Coreということが取り上げられています。統合必修科目というものを、学生に課すべきであるというのです。Coreというのは必修ということですか

ら、Integrated Coreを訳せば統合必修科目ということになります。その科目では、例えば専門学術間の連関を具体的に取り上げ、そしてまた社会とのかかわりを考察することになります。

Integrated Core

ボイヤーの説明の中で非常に印象深い言葉がいくつもあります。「隣人と重なり合う世界に我々は生きている」とか、「専門が重なり合う領域での学問的営為」が問われる、というようなことを述べています。私たちは、専門、専門と言って、自分の専門だけにこだわりますけれども、そういう自分の専門に、実は隣があるのだということですね。隣接領域というものについて、目配りがないところに第２のテクネーの問題が出てくるわけです。

そして我々の学問というのは、人生と結びつく知的営為でなければならない。そういうことを目標として取り入れる教育科目として、ボイヤーは総合必修科目（Integrated Core）ということを問題にしているわけです。　それは「すべての人々に共通の普遍的経験、すなわちそれなしには人間の協力関係が解体し生活の質が減退してしまう共通の活動に関わるものである」。　人間の協力関係が解体するというのはどういったことなのかということをイメージしませんと、この言葉の重みはわかりません。今、世界は解体しつつあります。アメリカは解体しつつある。「われわれの共通の住みかである地球との協力関係を否定することは存在の現実を否定することである」。なかなかこれは考えられませんね。自分が今、ここに存在しているということは、地球との協力関係を否定することではできない。そういう深みにまで我々の教育は根を張って考えられなければならない。

では総合コアの探求は、学術の領域なのかどうかということが、結局また問題になってきます。もちろん学術抜きにしてはあり得ません。一つ脱線しますが、大学審議会の答申でも問題になっていますけれども、一般教育と専門教育の有機的統合ということは、この間、数十年間日本の大学の大きなテーマでした。特に一般教育科目区分が大学設置基準にあった期間においては、一般教育と専門教育の有機的統合ということが問われ続けました。一般教育学会（大学教育学会）は、結局その問題をめぐって四苦八苦してきました。一般教育と専門教育科目の統合というのはどういうことでしょうか。端的に言いますと、専門科目と関係のない教養科目はあり得ません。そうであるのに、なぜ両者の有機的関係を問うのでしょうか。それは、一般教育は学術でない、という前提があるからではないでしょうか。

リベアル・アーツを教養というのは誤訳だと言いましたけれども、逆手にとりますとリベラル・アーツは教養である。しかして、リベラル・アーツの基本というのは何であるかというと、私はそれは基礎学術教育であるといいます。リベラル・アーツの中心は専門です。ハーバーフォードでもジョージタウンのカレッジに行っても、カタログに並んでいるのは数学、物理、哲学、芸術、といった伝統的な学問分野です。伝統的な学問分野が中心であって、それを修飾するかのように現代的な境界領域の専門分野が幾つかついている。ですから、伝統的なディシプリンズを勉強することが、本当は教養なのです。専門分野と分離した教養はあり得ない。

そういう意味で、私どもは誤解していたのではないか。舘先生という高等教育分野の専門家がおられますが、舘先生は、一般教育というのは誤訳だといいました。ゼネラルエデュケーションというのは、日本語に訳すならば高等普通教育である。高等普通教育ということで思い出すのは、旧制の高等学校の教育内容です。すなわち、高等学校の設置令の中に、高等普通教育と書かれていました。です

から、日本はそういう意味では大変不幸であったわけで、一般教育というものと専門教育とが対立する対置づけにありました。だから一般教育と専門教育は統合しなければいけないという発想でした。それで一般教育は機能しなかった。ですから私は、一般教育と専門教育の統合というテーゼは無意味であると思います。それでどうするのか。専門だけやっていればいいのかということですね。

第２のパイデイアを問う

さて、問題は残されたままです。すなわち、第２のテクネーに対する第２のパイデイアの問題です。第２のパイデイアを問うということは、第２テクネーそれ自身の中から問えるのかという問題です。第２のテクネーが第1のパイデイアの中から生まれてきているわけですが、生まれてきた第２テクネーというものは、パイデイアを問えるのか。学術それ自身が人間にとって大切なパイデイアを問う視点を持ち得るか。この難問が解けない。この難問を解くということは思想・信念の問題になります。それぞれの大学の理念に関わります。

法人化した国立大学においては、第２のパイデイアを求める根拠をどこに求めるのでしょうか。学術研究に徹底するということは大事でありますが、同時に、大学の存在根拠である知的誠実性において、第２テクネーに関わる欠如態認識を持たなければならないでしょう。それをどうするのか、という問題です。

先ほど、一般教育学会の目的は、学問的に一般教育を基礎づけることであった、といいました。そうして、それと同時に一般教育学会はミッションを持ったことを述べました。そういうミッションの発想の根拠はどこにあるのでしょう。一般教育学会のミッションを発想した人は、一体どこにその根拠を置いたのだろうかということが、私には問いとして残っているのです。

そういう問いに対する次善の策として、私は作業契機としての一般教育の復活を提唱したいと思います。一般教育という言葉が死語になってしまっているわけですが、私はいわゆるカリキュラム用語としての一般教育ではなくて、コンセプトとして一般教育ということを改めて問題にしたいと思います。一つの作業契機です。一般教育というのは本来、私の考えからすれば、市民社会の一員としての教養です。市民社会の一員としての教養という視点で、教養教育をもう一度問い直してみる必要がある。

現代において機能する教養というのは一般教育だと私は言いたいわけです。しかし、そういうだけでは空念仏で、どなたも聞く耳を持ちません。そこで私は、Doing Liberal Artsということを、自分の大学で唱えました。Doing Liberal Artsという発想のもとになっているのは、Doing Theologyという言葉です。行動する神学ですね。この発想は、アメリカのフェミニスト神学に起源があります。私の妻がこの方面の専門家で、毎度食事の席でフェミニスト神学の講義をしますので、それで私も影響を受けました。かぶれたわけです。私はフェミニスト神学から見ますと批判の対象でありますので、なかなか苦しい立場にありますから、謙虚に学んだわけです。

Doing Theologyということを一言で言うとこうなります。神学というのはほぼ机上の学問ですね。頭の中の学問です。ところがフェミニスト神学者たちは、神学はプラクシスなしにはあり得ない、といいます。プラクシスの中から神学が生まれ、神学の中からプラクシスが発想される。そういうダイナミックな関係をもう一度構築し直すというのがフェミニスト神学者たちの主張です。考えてみればこれはプラトンの方法ですね。テオリアとプラクシスでしょう。そこで私は、それを学術に応用して、

Doing Theologyならぬ Doing Liberal Artsといっています。 Doing Liberal Artsは英語ではないという批判がありますが、私はあくまでもDoing Liberal Artsということで、大学のミッションを表現しています。

Doing Liberal Artsを日本語で「行動するリベラル・アーツ」と訳しまして、この言葉を定着させるようにしています。ある新設の教養大学が、「行動する知」ということを標語に掲げたのですが、これは詐欺行為です。標語には登録権があるわけで、私たちの「行動するリベラル・アーツ」を簡単に剽窃されては困ります。そうしましたら、別の大学が、「戦う知」と言っています。似て非なるものです。

Doing Liberal Artsは、一般教育の発想と重なっています。教育を現実の世界と密接に関係させることです。あるいは別の言葉で言いますと、現代世界に対する大学のコミットメントです。大学は世界に対して責任をとらなければいけない。世界に対するコミットメントとして我々の教育内容というものをもう一度考えてみるということです。もちろん基盤は学術教育にあります。しかしそこに学生の感性を覚醒させる幾つかの要素をつけ加えることによって、大学の世界へのコミットメントを表現する。どういうふうに付加するかということは、それぞれの大学の理念に関わる問題であると思います。

大変未熟な話でしたが、ここで終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。（拍手）